

令和7年度第1回千葉県文化芸術推進懇談会 開催結果

1 日 時 令和7年7月22日（火）午後2時から4時10分まで

2 場 所 千葉県自治会館 9階第3会議室

3 出席委員（委員総数11名中9名出席）（50音順）

石橋委員、植田委員、垣内委員、草加委員、小林委員、こまちだ委員、齋藤委員、佐々木委員、西委員

4 会議次第

1 開 会

2 挨拶

3 委員紹介

4 座長・副座長の選出

5 議 事

（1）千葉県文化芸術推進基本計画の令和6年度実績について

（2）第2次千葉県文化芸術推進基本計画の令和7年度の主な取組について

5 座長・副座長の選出

委員の互選により座長には草加委員が選出され、また、副座長は座長からの指名により石橋委員が選出された。

6 議事概要

（1）千葉県文化芸術推進基本計画の令和6年度実績について

事務局から資料1により千葉県文化芸術推進基本計画の令和6年度実績について説明。

委員からの質問・意見等は以下のとおり。

<質問・意見等>

【委員】

前計画である千葉県文化芸術推進基本計画の各指標について、定量的に目標を示している項目もあれば、そうでないものもある。進捗を計るために定量化すれば良いのかという考えもあるし、それがすべての評価ではないとも思う。一つの参考資料として今の千葉県が俯瞰できるのではないか。

【委員】

感想と質問をそれぞれ。まず実績を数値として表しているが、先ほど委員の言っ

たとおりそれがすべてではないというところも念頭に置きつつ、各指標において数値が伸びる傾向にあったことは良いことだと思った。特に、令和4年度からの3年間の推移を見て、新型コロナウイルス感染症の影響はほぼ無くなっていると捉えられる。当社の方でも同じ傾向を示しており、県民の皆様が活動的になっていることは我々も実感としてあったため、そのあたりが実績に表れていると思った。ここからが更なる伸ばしどころとなるので、より県民の皆様に改めて文化芸術に目を向けていただくチャンスが来ていると理解した。今回取りまとめた活動をしっかり成し遂げていくことが肝要であると感じた。

質問になるが、各指標の数値に関して、パーセンテージで設定しているものと人数で設定しているものがあるが、母数である県民の人口の変遷との影響はどうか。

人口のトレンドは1年ごとに大きく変わるものではないが、増えている・横ばい・減っているという中で指標が伸びているのかどうなのか。仮に、人口が減っている中で指標が伸びているのであればそれはポジティブであるし、逆に人口が増えているということであればどうなのかなど。傾向だけお伺いできれば。

【事務局】

令和7年6月1日時点の県人口は約627万人。過去5年間の推移をみると、いずれも627万人程度で推移しており、ほぼ横ばい。

【委員】

大きな変動がない中で指標の人数が増えていることは良い傾向だと思う。ここから更に増加を目指していくということも一つ目標になるのだろう。

【委員】

各指標の表し方について、パーセンテージで表記されているものと人数で表記されているものがある。例えば、柱1の「鑑賞した人数」は450万人で、県人口に対する割合は70%を超えており、大変高いことがわかる。一方で、「活動した人数」は57万8千人で、同じく県人口割合でみると9%程度と必ずしも高くないことがわかり、相当差があるように見える。

指標による出し方に違いがあるのかもしれないが、傾向を理解するためにはパーセンテージ表示した方が良いものもあるのではないかと。

【委員】

指標について、パーセンテージと人数があるのは、捕捉できる機関が異なるからではないか。調査によってわかる県民の割合と、文化会館等で捕捉している人数の積み上げ。県民一人ひとりが「鑑賞した」と回答した比率と、延べ人数であるものであるため、違うのでは。そこは見せ方の工夫が必要かもしれない。

細かいことになるが、「県と県立の施設が」という指標もあれば、「県と県内公立施設が」という指標もある。また、県内公立施設であっても自主事業に限るなど、制約がある中で数字を取ってきている。数字の取り方には限界もあると思うが、それは読み手の方にどういった数字であるかわかるように表示されればよろしいのかなと思った。

基本指標について、どちらの実績も全国平均（文化庁「文化に関する世論調査」）と比べると高い数値となっているのは素晴らしいが、目標値が高すぎると感じている。積極的に高い目標値を目指していくという意欲も良いと思うが、同時に、こういう指標は実現可能な数値を目指して、支障があればそれをクリアしながら達成していくというプロセスを踏みながら改定していくという考え方からすると、現在の目標値は非常に高く、当面手が届かないと感じられる。

併せて、参考資料を見ると、県内市町村の文化振興施策に関する予算額が、所在するエリアによって大きく異なる。ベイエリアに比べると九十九里のあたりは10分の1程度のようなようである。人口が少ないということもあるのかもしれないが、差がある。

このあたりも含んだ上で、今後実績を伸ばしていくということであれば、県としてどう考えているのかということも気になった。

また、資料1のP.12にある「千葉県誕生150周年記念事業」について、約230万人が参加し経済効果は約171億円と書いてあるが、観光消費の波及効果であると大体2.5から2.6くらい。それで一人当たり単価を計算すると5000円以下になる。もう少し単価を上げるというか、県外から人を呼ぶなども考えても良いかもしれない。

【事務局】

人数で表している指標とパーセンテージで表している指標について、読み手にわかりやすく伝わるような見せ方を検討していきたい。

【委員】

基本指標の「活動した県民の割合」について、目標値は50%となっており、次の計画も変わらず50%である。一度目標値として出してしまった数値であるので、下げることはなかなか難しいのではないかと推察する。

実績の検証において、県民の方が文化芸術活動をしなかった理由が書かれている。3年間計画を推進し検証してきた中で、ある程度の結果を得られたが、目標値との乖離が大きいので、この部分はアプローチの工夫が必要なのかなと思った。

具体的に言えば、「活動に関する情報を得られない」のであれば、今はインターネットやSNS等で発信をされていると思うので、SNS等を承知していない方々へのアプローチを少し増やした方が良いのではないかと思った。

【委員】

こういった調査をすると「時間がない」、「興味がない」、「情報がない」等の回答がどうしても多くなる傾向がある。ある程度こういった方々がいるのは仕方ないことではあるが、その中から県として取り組むべき課題をどう顕在化していくのかを見失わないようにしたい。

時間がないのはどうしようもないし、興味がないのをひっくり返すのも簡単ではない。そう考えると関心がある方へ必要な情報を確実に届けるには、どうしたらよいのかという戦術が重要になってくるのではないかと。

【委員】

柱5の分析で「文化芸術活動を行う際に課題と感ずる点」で「練習・制作のための場所が少ない・遠い」、「発表の場が少ない・遠い」という回答があった。

教育現場からの視点で文化芸術活動を考えた時に、もっと身近に接することができるのであれば興味を持ってもらえないのではないかと思っている。例えば、高校の現場で言うと、生徒たちは学校内だけでなく校外でも活動したいという意欲はあるが、身近な場所での発表の機会がもらえないため、発表の場はコンクールやコンテスト等で留まってしまうことが現状である。

前任の学校では、吹奏楽の強化のため生徒たちに場数を踏んでもらおうということで、近隣の駅長にお願いして駅コン（駅構内でのコンサート）を実現した。

身近な場所でこういった活動を見ることで文化芸術に興味をわく方もいると思う。駅構内や商店街など人が多く立ち寄る場所で、生徒たちが日ごろの文化活動の成果を発表できるよう、もう少し県の方でも働きかけを行ってほしい。

やはり、練習や発表の場が少ないというところがもっと変わっていかねばいけないのではないかと感じた。

【委員】

先ほど、県の人口の話があった。計画期間の3年程度ではさほどの違いはないのかなと思いつつ、障害者芸術文化活動支援センターの活動等で県内各地を回っていると、南房総や銚子の方は元々あった建物が無くなっているなど、やはり人口が減っているように感じる。東京に近い地域は人口が増え、遠い地域は減っている。全体としては変わっていないということなのではないかという気もしている。

その上で、発表の場が少ない・遠いということについて、南総文化ホールで相談会を開催した際に、発表の場がないことや、仲間も集められないといった相談があった。例えばダンスをやりたいと思った時に練習の場所まで1時間以上かけないと行けないとか、人が集められない、場所も借りられないなど。県政世論調査において練習・発表の場が少ないと回答された方たちがどの地域にお住まいなのかということも重要なのかなと思った。

【委員】

文化の効果をデータで取るということ自体がかなり難しいことであると思う。文化芸術の範疇はいったいどこまでなのか、多分定義できないと思う。

国もそうかもしれないが、こういったデータを統一した基準で取っていないとほとんど比べ物にならない。観光も同じで、国と県と市町村でデータのとり方が異なるので、一つの参考として使うことはできるが、文化も観光も定義づけが難しい面があるため、調査も難しいのではないかと感じる。そういったところで、この数値を出している県民世論調査の調査内容、県民のこういったところにどう調査しているのかというところが気になった。

今後の方向性のところで機会の提供とあったが、必ずしも文化施設にこだわる必要はないと思う。指標では県立や県内の文化施設とあるが、そこだけでなく、あらゆる場所で文化芸術に触れる機会の提供や働きかけをしていただけると良いと思う。

例えば、房総のむらの中に旧学習院初等科正堂があり、施設を利用できるようなはあるが頻繁に活用されている様子が見られない。去年は栄町百年後芸術祭で正堂内でのコンサートや、建物前でミュージカルが行われたが、年間を通じてそういった活用がされておらず、非常にもったいないと思っている。そういう施設は県内に沢山あると思う。そういったものを活用し、文化に限らず様々な活動の機会を提供していくと良いのではないか。

また、東葛エリアは常磐線沿線で東京都に通勤している方々が多く住んでいるので、県民意識は低い方だと感じる。そういった方々への底上げが必要に感じるが、すぐ働きかけて活動が定着するものでもないので、長い目で見て地道な働きかけを続けていくことが大切。

【事務局】

文化芸術の範囲については、昨年度の議論の中でも色々と御意見があった。国の法律でいわれているものをベースとして広く取り上げている。裾野を広げようということで、アニメを見ることも鑑賞であったり、SNSで写真をアップすることも自分が感じたことを発信するということで大事な表現の1つであるので、そういうところも拾っていこうと考えている。

昨年度の懇談会では、祭りの囃子も文化芸術であるということを意識していなかったという委員の方からの御意見もあったので、そういうものも含めて文化芸術であるということを発信し、県民の方々の意識を醸成していきたい。

また、成果指標を文化施設に限定しているものについて、文化施設以外でも音楽フェスやコンサートが行われており、その数値を拾えればもっと伸びると考えているが、統計上なかなかそういったところの捕捉が難しいこともあり、現在の指標（公立文化施設で行っている自主事業）となっている。

文化施設以外の場所でも機会の提供を行っていった方が良いという御意見につ

いては、県としても同じ考えであるので、そういったことも含め、県民の方々に色々な活動をしていただけるよう施策に取り組んでまいりたい。

【委員】

今回、このような形で実績を取りまとめていただいたことによって、たくさんの取組や支援があるということがわかり、千葉県の実力を感じた。

一方で、なぜ参加しなかったのかということに対する県民の御意見として、こういった取組を「知らない」という意見があることもまた事実。情報社会の中で、本当に良い情報にアクセスするのは大変なことであるので、難しいことではあるが、その辺りの工夫ができると良いのかなと感じた。

また、各地域で行われている行事があるが、それもやはり知らないので行けないことや、物理的に距離が遠すぎたり、そこに行くまでの交通手段が少ないため興味があっても行くことができないという方もおられると思う。そこについても一工夫できると良いのではないか。

指標の数値について、総体としてパーセンテージ等で表しているが、例えば柏市での祭りや、九十九里の祭りでは、祭りの質が異なる。そこを一つの数字にまとめてしまうということは、実は個性が失われているような気もしていて、数字を並べてみただけでは課題に対するアプローチができないのではないか。

他の委員からも御意見があったように、地域ごとやジャンルごとに考えていく、個々を見ていくことによってその特徴やどういうアプローチをしていけば解決するのかなど、一歩踏み込むことができるのではないか。

政策的な話になると総合的に見ていくことが必要なのかもしれないが、個々に見て、一歩踏み込んで考えていかないと実績を伸ばしていくことは難しいのではないかと感じた。

【委員】

先ほど他の委員から新型コロナウイルス感染症について、令和4年度からの3年間で影響はほぼ無くなっていると捉えられるという話があったが、こちらとしても同感である。

ただ、高齢者の文化団体がこの期間に活動を休止・解散してしまうといった新型コロナウイルス感染症が残した爪痕が残っていると感じている。そういった中で、昨年の千葉県誕生150周年記念事業が多くの方にとって文化活動を再開する大きなきっかけになったのではないかと感じている。

また、地域ごとの個性を考えていく大切さもあると思う。県立文化会館の指定管理を行なっている中での事例として、東総文化会館の所在地域ではカラオケや合唱などの歌に関する文化活動が盛んである。新型コロナウイルス感染症の影響により活動を休止・解散してしまった団体が多くあったが、再度、みんなで第九を歌おうという機運が盛り上がっている。昨年からは旭市と、市民の方々、当財団が

来年一緒に事業を実施できたら良いという方向で動いている。

旭市だけでなく、近隣の市町の方々にも関わっていただきたいと考えている。東総文化会館を起点に車で1時間圏内の人口は50万人ほどおり、その方々に対して働きかけを行っていくことが、県の文化芸術振興の一助になるのではないかと思う。

南総文化ホールでは、モノづくりのサークル活動、美術や書道の発表会だけでなく、ステンドグラス教室による作品展や、水石の展覧会、石や貝殻に絵を描いたアート作品展などがある。

パフォーミングアーツで言うと、南房総はダンスが盛んで、全国的にもブレイキンなどダンスは流行っているが、南房総ではフラメンコである。世界のフラメンコ人口で日本は2番目に多いそうだが、30年ほど前に館山市で開催された南房総フィエスタ・イン館山が契機となって全国学生フラメンコ連盟ができている。全国大学フラメンコフェスティバルは、新型コロナウイルス感染症の影響でここ数年は行われていなかったが、令和4年から花火大会と一緒に開催している。現在、そこに南総文化ホールが参画し、館山市だけでなく周辺の市町や商工会議所等にも参加してもらい、さらに盛り上げていけないかと取り組んでいるところである。フェスティバルは30年続いてきた素晴らしい取組であり、日本フラメンコ協会からも館山市が第2のフラメンコの聖地と言われている。

館山には房州うちわというものがあり、歴史としては100余年程度とそこまで古いものではないが、それでも国や県の伝統工芸品に指定されていることを考えると、30年続いてきたフラメンコは地元に根付いていると思う。我々はこの計画の実践者として、そういうものの大切さや地域ごとに考えていく重要性をしっかりと考えながら取り組んでいきたいと思う。

【委員】

全体の基本指標として、鑑賞が77%、活動が28.9%と、全国に比べると高いという話があった。その話と比較するのが柱1と2である。柱1の鑑賞した人数は、県や県内公立文化施設に限った話であるが、約450万人となっており、県民の71%程度となっているので、基本指標の鑑賞人口とあまり差異がない。つまり県立や公立の施設が鑑賞の場としての役割を果たしているということがわかる。それに対して、活動を行った人数は9%とかなり低く、全体の28.9%とは大きな差がある。きっとその辺が足りていないのではないか。

また、柱2の伝統芸能に限っての話となると更に落ちてくる。きっと伝統芸能に至っては施設だけが担う役割ではなくて、町や地域の活動が重要になってくるのではないだろうか。

柱3に関して、他分野との連携に取り組んでいる市町村となっているが、そういった活動を市町村が主体としてやっていることに限るのか、地域のNPOや民間団体、つまり主体が自治体だけでないものも含めるともう少し回答が変わってくる

のではないだろうか。設問の「取り組んだ」という表現を「取組が行われている」に読み替えるという方法もあるのかもしれない。それでも目標に届くかどうかはわからないが、地域によっては民間団体が主体となって取り組んでいるので市町村は行っていないという事例もあるのではないかと。主体はどこでもいいので、地域で類する活動が行われているのかどうかを判別できることが重要。そのことが見極められる設問にしてはどうか。

また、柱4の実績について、こんなに少ないものかという印象がある。39歳までを若者とみなしているという前提を踏まえると、もう少しあっていいのではないかと。数字の取り方なのかどうかも含めて少し確認が必要ではないかと。

柱5も、目標と実態が離れているので、そこは先ほどからの委員皆様の御意見も参考にされながら伸ばせるように取り組んでいただきたい。

(2) 第2次千葉県文化芸術推進基本計画の令和7年度の主な取組について

事務局から資料2により第2次千葉県文化芸術推進基本計画の令和7年度の主な取組について説明。

委員からの質問・意見等は以下のとおり。

<質問・意見等>

【委員】

先ほどの議題でも話題に上がった、人口に端を発した地域差などを考えると、この先5年6年を見据えたときに、改めてこどもへの対応が重要になってくるのではないかと。計画内の1つの要素ではあるが、これからの文化の担い手、発信者になり得る層であるこども・若者をどう育てていくかというところに力点を置いても良いのではないかと感じた。

人口が増えているエリアはこどもも増えていると思うが、仮説として、その方々が千葉ではなく東京を向いている状況なのであれば、千葉県の文化の豊かな地域に足を向けていただく、興味を持っていただくような広報活動であるとか、そういった活動をされている方・組織への支援。これらのことをもう少し手厚くしていくということをもっと議論しても良いのではないかと。

各地域、組織の皆様も御苦勞されていることだろうと思う。イベント等に足を運んでいただきたいがなかなか情報が届かない、あるいは物理的に距離が遠すぎるということもあるかと思う。こういったところに力を入れていければよいのではないかと。

【委員】

確かに、こどもに対する視点も重要だと感じた。6年という時間は10歳の子が16歳になり、16歳の子は22歳になる。この辺りの年齢の6年間は大変長く変化も大きい時間である。

【委員】

新規事業で千葉県文化会館のリニューアル事業が挙げられている。今年度から第2次計画が始まっていく中で、県立文化会館4館の立ち位置や役割について県としての考え方があるのであれば教示いただきたい。

【事務局】

県立文化会館の今後のあり方については、令和5年度に検討会議を設置し、昨年度、検討の取りまとめをしている。その中で、千葉県文化会館は本県の文化芸術振興の中心的な拠点として位置付けている。なお、その近くに所在する青葉の森公園芸術文化ホールはホールの規模から、千葉県文化会館の中ホールとして位置付け、2館で中心拠点として優れた芸術家を呼び鑑賞機会を提供することや、県民参加による文化芸術活動などを今後の役割や機能として整理している。

また、東総文化会館及び南総文化ホールでは、地域の文化芸術の中心拠点として整理している。

【委員】

5ページ目の施策の柱2において他分野との連携について触れており、国立歴史民俗博物館との連携などが挙げられている。こういった様々な分野との連携は重要であると思っており、計画の実働部隊である我々にとっても、こういった視点は必要だと思っている。

また、計画のスタートの年で新規事業があることや、予算額が大きいことも良いことと思うが、昨年度の事務局からの発言において、市町村の取組がなかなか伸びないという話の中で、市町村の方がこういった取組が該当するものであるかというところが理解できていない可能性があるという発言があったように思う。成果指標は「取り組んだ市町村」となっているが、主な取組は県主体の取組しか掲載されていない。県主体で行い、事例を示すことも大切ではあるが、限界があると思うので、そこは市町村の取組に期待したい。

【委員】

都市部は身近に文化芸術に触れる機会があると思うが、南総や銚子など、過疎地域での活動が一番課題だと思っている、資料を見る限り、指標や取組は県のスタンスしか感じられない。他の委員からも発言があったように、もう少し市町村の取組に手を差し伸べる施策も考えていく必要があるのではないかと思った。

【委員】

千葉県を構成する市町村も含めて文化振興をどう考えていくのかということについて発言があった。本計画及び懇談会は県が主催しており、県が何を期待するの

かを明確に提示することが大切であると考え。さらには、市町村を含めた文化振興のリーダーシップを県がとっていくことが更に重要なことなのかもしれない。

【委員】

計画内の「国際交流」について、千葉県に移り住む外国人の方は相当増えているのではないと思う。自分が住んでいる地域で、オーナー・従業員ともに外国籍の方々が運営している農園があったり、また関わりのある福祉施設においても、職員の1割が外国籍の方だったり、特別支援学校に通う外国籍のこどももいる。

色々な国のルーツを持ちながら日本で育つこどもが増えてきていることから、それぞれの国の文化を交流させ、表出させ発展させることが、新しい文化を作ることになるのではないかと考えている。

【委員】

共生社会や社会包摂などという言葉が先行しているが、障害者に対する施策は徐々に明文化されてきているが、国籍の違う人たちとどう一緒に生きていくのかという施策はまだ十分とは言えないのかもしれない。また、彼らには、彼らなりのコミュニティがあり、それを無理やり開いてまで日本の伝統文化を享受するという取り組みは望ましくないかもしれない。ただ、地域を知ってもらうことや、地域の繋がりを築く手段として文化芸術を活用していくというのも一つの方法になるのではないか。そのようなことも施策として取り入れていくのはこれから必要ではないか。

【委員】

柱2の成果指標について。県の訪日教育旅行交流事業というものがあり、海外の修学旅行生（小学校～高等学校など）が県内市町村に宿泊し、その地域の学校や住民と交流したり、色々な伝統文化や行事等を体験してもらう取組であるが、今年度上期（7月時点）において四十数校の受け入れがある。これも観光を通じた国際交流であり、文化交流の1つであると思っている。必ずしも市町村が取り組んでいるわけではないが、結果として市町村の協力をいただいている事業ではあるので、こういった取組も成果の一つとして見込んでいただくのも良いのではないか。

また、取組内容について、県の自主事業や県立施設での事業が主となることは致し方ないとはいえ、県立公立を問わず、民間の文化施設等で行われている取組も取り込めるような指標であるとよかったのではないか。誰もが活動しやすい千葉の文化としていくために、民間やNPO等の活動についても金銭的な支援から規制緩和的な支援まで柔軟に行っていく。そういった視点も必要ではないか。

例えば、川村美術館が閉館してしまっただが、建物は残っている。佐倉市なのか千葉県になるのかわからないが、県の文化資源の1つとして施設の利活用を考えることも良いのではないか。

【委員】

千葉の文化の中には食文化や景観なども含まれており、文化芸術基本法に定められている範囲よりも幅広く文化を捉えている。そういったところも十分生かしていくと良いのではないかと思う。

【委員】

3点ほどコメントする。まず、基本指標の「鑑賞した県民の割合」が90%を目指すというところ、攻めた目標であるなど感じている。また、「活動した県民の割合」についても、オンラインでの活動や、食文化や祭りなどの身近な活動も含むとされているが、読み手がそこまで理解してくれるのかということが懸念される。

普通に調査をされると、読み手にこちらの意図が十分に伝わっていないことから、実態が調査結果に反映されず、目標未達となってしまうかもしれない。高い数値を目指す気持ちはよくわかるが、もう少し現実的なところを想定しても良いのではないかという気はしている。個人の感想ではあるので、組織として目指す姿、目標値をこう設定されたということであれば特に異存はない。

文化芸術の範囲は様々あると思うが、ゲームや韓流ドラマなども含めてすべて「鑑賞した」の範囲として捉えるのであれば、9割という数字は逆に少ないのかなとも思う。その辺りが調査で十分に捕捉できるのかどうか、少し時間がかかるのではないかということが心配。

2点目は柱4の成果指標「千葉県に愛着や誇りを感じる人の割合」について。これは大変良いかと思う。アウトカムとして千葉県の文化芸術に親しむことにより、地域であったりこの時代であったりといった様々なところに愛着を持つことに繋がっていくのであればすごく良いと思うのでぜひデータを取っていただきたい。

データを取る上では、他のデータも合わせてクロス分析をしていただくと良いと思う。居住地や年代などある程度分かるのではないかと思うので、どの地域、どの年代の方がどう思っているのか、人口が多くマーケットの大きいところではどうなのか、マーケットの小さいところでも愛着を持って何か活動されている方はいるのか。その辺りを炙り出すこともやってみると良いと思う。

3点目は、この指標自体ではないが、政策である以上どうしても予算がかかることになる。主な取組に今年度予算額が掲載されており、見ていると文化会館や県立美術館・博物館など施設関係の予算があり、大きな割合を占めている。この指標に入れるかは別として、今後、文化施設については成果と課題の確認をして別途詳細な検討をしていただく必要があるのではないか。併せて、新しい試みとして7ページ目の芸術祭があるが、芸術祭にも結構お金がかかると思う。これはフォローをきちんとしていかないと取組が持続していかない可能性もあるので、持続して取り組んでいけるように成果や課題の分析等を行っていくことを検討してほしい。また、こういった取組は実施部隊として市町村との連携が欠かせないと

思う。国でも助成金を出していたりするので、そういったものも活用していくとより深みのある充実した事業になっていくのではないかと。

【委員】

鑑賞の手法など、コロナの残り香的なところがあって、オンラインも鑑賞の手法として価値があるのではないかとということで指標の中に取り込まれたという経緯があったかと記憶している。また、基本指標では年齢や地域などとのクロス集計ができる方が良いのかもしれない。県の施設がある周辺地域だけ鑑賞・参加の数値が高く、施設から距離がある地域は効果が薄いということがわかれば、施策の手立てになるのではないかと。

【委員】

議事(1)の取組で紹介があったが、市原の歴史博物館での事業に関わっており、縄文土器やガラスケースの中に飾られているような文化財をデジタル化し、3Dプリンターで出力することで、博物館に訪れたこともたちに直接触れてもらい興味を持ってもらうという取組を行っている。取組を行っている中で気づいたことだが、多くの方は文化芸術という結構構えてしまう。ガラスケースの向こう側にあって自分たちには関係のない話と思いがちであるが、実際に触れてみるとなんてことはない、何千年前に生きた同じ人間が生活の中で作って使ってきたものであるとわかる。そうすると非常に馴染みを感じてくれて関心を持ってくれるということがあった。

先ほどからアンケートの取り方についても話題になっているが、文化芸術のアンケートという形ではなく、逆の形で、人々が参加しているものを聞いていくと、実態に合った数値が出てくるのではないかと。そういった工夫をしていくと、その人自身が行ってきた活動が文化芸術だったということや、自分たちもこれを支える主体なんだという気づきに繋がるのではないかと。一般的なアンケートの取り方とは異なるかもしれないが、そういう形でみんなが主体者であること、一人ひとりが主体となって文化芸術は支えられているという気づき、シェアができると良いと思った。

また、自分たちが文化芸術を支える主体となっているという自負心を持った次世代が育っていくことによって、本計画に書かれている文化芸術振興施策が進んでいくのではないかと。そういう発想の転換も必要ではないかと思った。

【委員】

目標が90%となっているが、これを達成したら次はどうするのか。定量的な評価の先では定性的な評価を示すなど、全体的な評価の組み換えが必要になるのかもしれない。今後は、令和13年以降の評価をどうデザインしていくのかということを考えながらこの数年間の推移を見守っていく必要があるのではないかと。

【委員】

昨年、アウトリーチで東総地域や千葉地域の福祉施設を回った中で、重度障害がある方の施設でコンサートを行なった。演奏場所には入所者の方々が描いた作品があり、その作品への思いや制作の様子などを伺い、それを演奏者に伝えた上で作品をバックにコンサートを行ったことで、演奏者にとって理解が深まり、障害の有無やジャンルを超えたコラボレーションの大切さを再確認した。

今回の計画でも他分野との連携が柱になっているため、この点についてもしっかり取り組んでいかなければと思っている。

先ほど述べた当財団の福祉施設でのアウトリーチコンサートや、障害者芸術文化活動支援センターの事業などは、それぞれ単体での取組としてしか紹介できるところがなく、見る人や興味をもつ人が限られてしまう。各団体が連携して行っている活動や取組について、目に見えない成果の部分を含めて、県全体の大きな計画の中で紹介していただけると、自県に対して誇りや愛着を感じる県民が増えるのではないかと思う。御検討いただけるとうれしい。

【委員】

コンサートのきっかけは「ちばこどもホスピスプロジェクト」という、一昨年の3月に設立された NPO のプロジェクトで、常にいのちと向き合い暮らすこどもたちに芸術体験を伝えるというものである。今回のアウトリーチで、施設の皆さんの作品への思いが演奏者の方々に伝わったのは嬉しいことである。こういった形でフィードバックがあると、より取組が深まっていくと思う。

千葉県のアプローチと言うのは、やはり人との繋がりだと思う。その核の部分に文化があるということも、文化振興をしていく上で大切なことだと思う。是非、計画の取組などでご紹介いただければ。

【委員】

私の方からは今日の議論で気付いたことをいくつかお話しさせていただく。

先ほど外国人の話、国籍の違う人たちの話、障害のある人の話があった。社会にどうアプローチしていくのかということも含めて考えていかなければならないが、まず、文化芸術を社会参加の1つの手段として感じていただければ嬉しいこと。アーティストの方たちもきっと気づきがあったのではないかと思う。

目標感と現状が離れているところについては、具体的な施策、どういうことをやっていたら良いのかということを考えていく必要がある。特に、柱2の成果指標では「事業に取り組んだ市町村」と書いてあるが、「事業を行っている団体がいる市町村」とするとか、民間で取り組んでいる方がいればそこがカウントされるという考えもあるのかもしれない。事業に取り組んだと言われると、市町村が主体となって取り組んでいないといけないと思われるが、取組自体は市町村がやっても、

民間がやっても同じであると思う。こういった取組については、行政よりもNPOなど民間の方がより優れた取組みを行っているかもしれない。そういったことも含め、指標の取り方を見直していくことも検討していただけたらと思う。

それから、成果指標のこども・若者を対象とした事業の参加数は、実態はもっと多いのではないかと思う。県民630万人のうちどれだけこども・若者がいるのかはわからないが、現状値を見るともう少し参加者はいるのではないかと考えるが、調査の状況がどうだったかということも再度確認をいただけたらと思う。

また、先ほど他の委員からも話があったように、年齢や地域などとのクロス集計も確認できると新たな施策にも繋がることになるのではないかということ、次の改訂の時には基本指標の数値目標について、定量的なのか定性的なのかということや、新たな施策のデザインの仕方についても提案していかなければならないのではないかと思わされた。

【事務局】

本日は色々な御意見を頂戴した。来年度の予算編成に入っている時期であるので、いただいた意見を踏まえ、より良い施策となるよう努めていきたい。

指標のカウントの仕方について様々な御提案をいただいたところ、我々もNPO等の民間団体も含めて状況を把握できれば良いなと思っているところではあるが、対象が広く、それをすべて捕捉することが難しいため、自治体が行っている取組の中で傾向を掴んでいる。今後更に連携が深まっていけば捕捉できるようになることもあると思うので、そちらについては長期的に検討させていただきたい。

今回、第2次計画が始まったというところで、その中で大きなキーワードとして5つあると県の方では考えている。

1つは、議論の中でもあったが、身近なところにも文化芸術はあるんだということ。文化芸術と言うと、どうしてもハイカルチャーを想像してしまう方が多い。それももちろん文化芸術ではあるが、そうではなくてもっと身近なもので楽しんでいきたいと思います。これを県として発信していきたい。

2つ目、千葉県としての誇りや愛着と言うところも掲げているが、千葉県ならではのことを考えると、やはり都会に近いながらも自然があるということ。この環境を生かして文化芸術を推進していきたい。千葉県誕生150周年記念事業を展開した中で改めて感じたことでもあるが、本日いただいた御意見にも、文化施設でやることだけが文化芸術ではないということがあった。記念事業の中でも、屋外の自然に囲まれた中で音楽を聴くといった取組も始まったし、今後取り組んでいく芸術祭でも、田んぼの中にアートがあったり、また商業施設の中で文化芸術の発表などを実施させていただくといった新たな取組も始まっている。そういった自然の中でということも一つキーワードなのかなと思っている。

それから、記念事業の取組の中で生まれた連携ということについて、本日御意見のあった、自治体だけですべてができるわけではないので、色々な団体や地域住

民の方、商業施設の方など、色々な場面で御協力いただきながら進めていければと思っている。具体的にはちばミライ文化祭という事業で、商業施設の方からの御提案で、店舗等を活用して発表の場を設けたいという申し出をいただき、学生の日頃の成果を発表する場となっている。また、包括連携協定を結んでいる株式会社オリエンタルランドとも、色々な場面で連携させていただいていたり、ROCK IN JAPANでは音楽家の卵となる若手に発表の場を提供したいということで、オープニングアクトの枠を設けたりというような新たな取組も始まっている。

鑑賞に比べて活動が少ないという現状もあるため、もう1つのキーワードとして県民参加型の取組を増やしていくということ。見ているだけでなく一緒にできるような取組、施策を増やしていこうと考えている。

また、情報発信については試行錯誤しながら取り組んでいるところであるが、現状、プッシュ型の情報発信が課題ではないかと思っていて、興味のある方は見に来てくれるが、そもそも興味のない方には届かないので、そういった人たちにいかに情報を届けて見ていただくかというところを大きな課題として第2次の計画では取り組んでいきたい。

地域格差とこどもについて、千葉県誕生150周年記念事業では、結果的に県内全市町村が参加してくれた。やはり補助金を用意したことで取組が進んだというところもある。補助金については現在も継続しているが、どうしても財政力に差がある自治体はあるので、そういったところは補助金なども活用しながら補っていければと思っている。

今後の未来を担っていくこどもたちについても重要であると考えており、学校と連携し、授業等でアーティストが学校に訪問して楽器演奏などを教える取組なども行っているところ。また、県立美術館ではこの夏休みに美術館を解放する「ぐるぐるアートちば」という事業を今年度新たに実施することとなった。こどもたちにぐるぐる考えてもらいたい、そして美術館内をぐるぐる巡り、体を動かしながらアートを体験していただきたいという取組である。こういった取組を一つ一つ積み上げながら第2次計画の目標を実現できるように取り組んでいきたいと考えている。

最後に、今月から県立中央博物館で開催している「房総うみの幸大百科」は、県の農林水産部と連携し、見るだけではなく、海の幸をキッチンカー等で実際に食べられる機会の提供なども実施している。また県立美術館で開催中の「高島野十郎展」では、先ほど東葛地域の方にはなかなか足を運んでいただけていないという話もあったが、学校と連携し、バスを用意してこどもたちに見に来てもらえる機会の提供もはじめたところ。こういった取組も随時発信していきたいと思うので、引き続き御支援のほどお願いしたい。